

Title	20世紀ロシア農村の近代化
Sub Title	Agrarian transition in Russia in the 20th century : features, rates, and results
Author	Kornilov, Gennadii(Hidai, Takeo) 日臺, 健雄
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2018
Jtitle	三田学会雑誌 (Mita journal of economics). Vol.111, No.3 (2018. 10) ,p.309(95)- 324(110)
JaLC DOI	10.14991/001.20181001-0095
Abstract	<p>本論文は、新たな手法によって以下の問題を検証している。すなわち、農村部における経済面、社会面、政治面、人口面、そして文化面における変容の現象について、その動態と強度、進展と方向性を考察するものである。この新たな手法により、20世紀ロシアの農業および農村社会の発展における規則性ならびに特性に関して、より深い理解がもたらされる。</p> <p>This article substantiates a new methodological approach to this topic, which supposes the exposure of transformations in the countryside's economic, social, political, demographical, and cultural spheres, their evolution and paths, and their dynamics and intensity. Such an approach is conducive to providing more profound views on both regularities and particularities in developing the agrarian sphere and rural society in Russia during the 20th century.</p>
Notes	特集：20世紀のソヴェト農民と農村社会
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20181001-0095

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

20 世紀ロシア農村の近代化

ゲンナジー・コルニーロフ*

日臺健雄（訳）**

Agrarian Transition in Russia in the 20th Century: Features, Rates, and Results

Gennadii Kornilov*

Translated by Takeo Hidai**

Abstract: This article substantiates a new methodological approach to this topic, which supposes the exposure of transformations in the countryside's economic, social, political, demographical, and cultural spheres, their evolution and paths, and their dynamics and intensity. Such an approach is conducive to providing more profound views on both regularities and particularities in developing the agrarian sphere and rural society in Russia during the 20th century.

Key words: modernization, agrarian sphere, rural society, transformation, agents of modernization

JEL Classifications: N54, N94, N34

* ロシア科学アカデミー歴史考古学研究所ウラル支部
Institute of History and Archaeology of the Ural Branch of the Russian Academy of Sciences

** 和光大学経済経営学部
Faculty of Economics and Business, Wako University

20世紀ロシア農村の近代化の成果を一義的に評価するのには困難が伴う。ソヴェト期において、農村の近代化は鋼鉄の独裁の頂点からもたらされたが、その速度は、近代化過程の質および人々の健康が損なわれることを強いるものであった。その成功は、強制によって、特にコルホーズ農民の低廉な義務労働によって達成された。

〔ロシア農村の〕近代化は、キャッチアップという特徴、明白な軍事・政治的な特徴を備えている。古典的な〔近代化の〕種類における多くの課題（商品、資本、労働力の市場の創出、個人の自由の保証、自己発展メカニズムの創出）は〔ロシア農村の〕近代化では解決されなかった。しかし、近代化の必要性を否定することは不可能である。近代化は20世紀の世界的な傾向であり、文明としての意義をもつ現象であった。ロシアは農業国として20世紀を迎え、工業国として20世紀を終えた。近代化の諸過程により農村の生活の全側面が規定されたが、別の問題として、諸過程がいかなる形態で生じたのか、近代化の異なる段階においてそれぞれどこに優先度がおかれていたのか、そしてどのような成果が得られたのか、ということがある。

農業部門は、いかなる社会でも安定をもたらす基本的な要素である。農業システムの不安定性と、国家が直面する対外政策および国内政策の諸課題において注目された農業発展の水準の不均衡と、その根本的な変容の必要性の認識は、1905年、1917年、1991年における革命的事象の主要な促進要因の一つであった。農業関係を革新しようとする企図があったにもかかわらず、農業・農民の問題は、20世紀初頭と同様に、21世紀初頭においても焦眉の課題であった。20世紀の歴史的経験が示すことは、全ロシアのモデルは地域的な構成要素によって構造的に形成されたということであるが、そこには、権力が常には、もしくは全く考慮に入れなかったような歴史＝地理的、歴史＝経済的、歴史＝文化的な現実の特徴が含まれる。

近代化のなかでの農業部門および農村の社会的性格の変容は、「農業面の^{ベレホート}転換」という用語で示される⁽¹⁾。農業面の転換に際して、以下のことが生じた。土地の私的所有の確立、進歩的な農業技術や集約的な耕作システムそして農村電化の普及、科学的成果や新しい作業機具そして改良された農業機械の普及、市場関係や協同組合の発展（経済的変容）。農村人口の再生産の類型の変化、農村の家父長的な家族制度の解体（人口学的変容）。社会＝政治活動の民主化、農民の政治過程や政党そして政治運動への参加（政治的変容）。農作業の意義と課題に対する農民の保守的な経済観念の超克、農民の識字率の上昇と教育水準の向上、都市文化や都市部の価値観の浸透、生活意識や生活スタイル

- (1) Корнилов Г.Е. Аграрное развитие и создание системы продовольственного обеспечения в первой половине XX века // Россия в XX веке: Реформы и революции. Т.1 / под общ. ред. Г.Н. Севостьянова. М.: Наука, 2002. с. 507–515; Корнилов Г.Е. Трансформация аграрной сферы Урала в первой половине XX века // XX век и сельская Россия. Токио: CIRJE Research Report Series CIRJE-R-2, 2005. с. 286–316; Корнилов Г.Е. Аграрная модернизация России в XX веке: этапы, направления, результаты // Уральский исторический вестник. 2008. №2 (19). с. 4–14.

ルの世俗化（文化的変容）。広範な職種の職員，特に農業の機械化技術員，専門家そして指導員の農民出身者による編成（社会的変容）。村落ネットワークの変化や道路の建設（村落の様式面の変容）。

農業面の転換の方向性，発展の速度，構成要素の発現形態は，具体的な歴史的事情，建設的要素と破壊的要素との闘争によって条件づけられ，また具体化される。

ロシア農村における近代化の過程は，一定の条件のもとで以下の3つの局面に分けることができる。第1局面：19世紀末から20世紀中葉。第2局面：20世紀中葉から1980年代末。第3局面：1990年代初頭から2000年代初頭。時期区分は，農村の生活に質的な変化をもたらした要因の組み合わせに基づいてなされている。各局面は，農業面および食糧面の危機という情勢のもとで始まっている。この手法により，ロシアにおける農業面の変容を，過程の継続性，連続性という観点で考察することができる。農村近代化の過程の進展度は次頁の表で示される。

20世紀を通じて，農業面の転換の主要な構成要素はさまざまな時期に多様な形で現れたが，同時に現れることはほとんどなかった。このことは，ある時期に農業の発展戦略を決定する際，権力は多様な形でその実現性を視野に入れ，また目下の優先度および現実的＝歴史的な情勢を考慮したことを示す。かくして，土地の私的所有の導入は20世紀初頭および20世紀末においてのみ実施されたのである。農業面の転換はこの100年の間に遂行されたが，それは断続的かつ飛躍的な性格を伴っていた。この転換は矛盾をはらんでおり，新たな矛盾，さらには新たな闘争をも惹起した。

すべての局面において，農業面の転換の内容は，耕作システムの転換，より正確には粗放的なシステムから集約的なシステムへの転換によってその多くが規定されている。土地は農業における主要かつ不変の生産手段である。農業面の転換の第1局面では農業の粗放的な発展が支配的であった。20世紀中葉まで，ロシアの広大な未開発の土地群〔の存在〕により，農民は土壌の肥沃度を上昇させるという課題には直面せず，肥沃度の回復だけが問題となっていた。ロシアにおいて穀作地帯は1913年に6,290万ヘクタール（ha）だったが，1953年には6,820万haまで拡大した。第2局面では，穀作地帯は1964年に8,160haまで拡大していたが，その後は一貫して播種が減少していった。第3局面では，穀物の播種は継続的に減少していった。1991年には6,180万haだったが2000年には4,560万haまで下落した。〔拡大期における穀物の〕播種の増加は主にジャガイモ，野菜，飼料用作物の栽培を犠牲にしてなされていた。食用豆類栽培の収穫高は徐々に減少した。1913年には全国平均で1ha当たり8.0ツェントネルであったが，1950年代初頭には1ha当たり7.0-7.6ツェントネルとなったものの，1990年には1ha当たり19.5ツェントネルまで顕著に増加した⁽²⁾。

農業面の転換の開始までは，農民経営の大部分は自家消費分を確保するのが精一杯な水準にあった。国民の食糧を確保するシステムが導入されたにもかかわらず，天候条件の不順によってしばし

(2) Симчера В.М. Развитие экономики России за 100 лет: 1900–2000. Исторические ряды, вековые тренды, институциональные циклы. М.: Наука, 2006, с. 496–500.

表：ロシアにおける農業面の転換の進展度（19世紀末－21世紀初頭）

農業面の転換の内容		第1局面			第2局面		第3局面
		19世紀末 －1917年	1917－ 1929年	1930－ 1953年	1953－ 1965年	1965－ 1980年 〔代末〕	1991年－ 21世紀初頭
I. 経済面	土地の私的所有の強化	+					+
	先進的な農業技術の導入	+		+	+	+	
	耕作における集約的システムの導入			+	+	+	
	農業生産における科学的成果の導入			+	+	+	
	新規の作業機具や農業技術の利用	+		+	+	+	
	農村の電化		+	+	+		
	農村のガス化		+			+	
	市場関係の発展						+
	協同組合の発展	+	+				+
II. 人口面	再生産の類型の変化				+	+	
	家父長的家族制の解体と都市的家族制の形成			+	+		
	農民の大規模な移動	+	+	+	+	+	
III. 文化面	農作業の意義と課題に対する農民の保守的な見解の克服	+	+	+			
	識字の普及	+	+	+			
	都市文化や都市部の価値観の浸透			+	+	+	+
	生活面における意識および形態の非宗教化			+	+		
IV. 政治面	社会＝政治活動の民主化		+	+	+	+	+
	農民の参画：革命	+					
	〔政治〕運動	+	+		+	+	+
	政党	+	+	+	+	+	+
	独自のスローガンおよび要求の提起	+	+				
V. 社会面	農民出身の広範な職種・職員の出現		+	+	+		
	機械化技術員〔の配置〕			+	+	+	+
	専門家〔の配置〕			+	+	+	+
	年金の保障				+	+	+
	無料の医療受診		+	+	+	+	+
	無料の教育		+	+	+	+	+
VI. 村落の様式	村落の改造			+	+	+	
	村落の廃絶				+	+	
VII. 食糧安全保障面	農村住民の飢餓	+	+	+			
	食糧備蓄の形成：家族・農戸レベル	+	+				+
	共同体〔レベル〕	+					
	国家〔レベル〕			+	+	+	+

ば飢餓に見舞われた（1901年、1906年、1911年）。1921–22年には、この天候条件の不順という要因は、内戦終結後に一層深まった混乱やさらにはボリシェヴィキによる食糧政策もあわさって、悲惨な飢餓を招いた。スターリンによる「上からの革命」——農業集団化——の遂行は、農業危機を引き起こし、1932–33年の恐ろしい飢餓の原因となった。1941–45年の戦争の結果もたらされた混乱は1946–47年の飢餓の原因となり、1950年代初頭のコルホーズの統合は農村部での食糧危機の原因となった。⁽³⁾ 農業面の転換の第1局面では、特に不作が2年連続で継続した場合、伝統的な社会固有の特徴——周期的に発生する飢餓——が根絶されることはなかった。

社会的＝政治的な激変は農業面の転換に影響を与えたが、停止させることはできず、特別な性質を付加した。農業生産が1913年、1928年、1940年、そして今では1990年の水準を定期的に回復したことにみられるように、農業の発展はかなりの程度において粗放的な基調で推移している。農業面の転換の特質は、特に第1局面においては、戦争および革命と結びついて長続きするという性質に現れた。農民経営は、生存を図るため、定期的に旧式で粗放的な農業システムに絶えず立ち戻ることを強いられた。農民の人口1人当たりの労働生産性や実質所得は実際のところ全く上昇しなかった。コルホーズ期においては、コルホーズ農民にとって経済活動への刺激〔インセンティブ〕は存在せず、蓄財どころではなく生存を図る必要性に迫られていた。20世紀の農民は、住民のなかで最貧の部分に留められていた。

農業部門における変容は脱農民化をもたらした。この過程は、農民数の減少だけでなく、農村住民の生活様式の変化も伴った。農民は、社会的に形成された自らの特徴や特質を徐々に失っていった。脱農民化には内面的および外面的という2つの側面がある。外面的な側面は農民人口の物理的な減少に現れた。この過程の特徴は政治的ならびにイデオロギー的な要因が優位であるという点にみられるが、これらの要因は脱農民化を顕著に加速させた。1897年時点で農村人口はロシアの全人口の85%を占めていたが、1950年代後半にはロシア共和国の農村人口は全人口の48%となり、1990年には26%となった。⁽⁴⁾

脱農民化のうち活動的で明白に現れた外面的な過程は、内面的なもの——農民の生活行動形態の変化、伝統的生活様式の破壊——によって補完された。内面的な脱農民化は徐々に農村住民の文化的伝統、余暇、世界観を捉えていった。社会的集団としての農民の特殊性、特色は徐々に失われていった。

(3) Продовольственная безопасность Урала в XX веке: документы и материалы / под ред. Г. Е. Корнилова, В. В. Маслакова. Екатеринбург, 2000. Т. 1; Т. 2.; Баранов Е.Ю., Корнилов Г.Е., Лабузов В.А. Аграрное развитие и продовольственное обеспечение населения Урала. 1928–1934 гг. М.: Издательско-торговая корпорация «Дашков и Ко», 2009.

(4) Население России в XX веке: Исторические очерки. Т. 2. 1940–1959 / отв. ред. В.Б. Жиромская. М.: ИРИ РАН, 2001, с. 173, 361–362.

脱農民化はかなり長期にわたる過程であり、農業面の転換による産物である。脱農民化は以下の一連の要因によって抵抗を受けた。大都市の中心部からの遠隔、後進的な農村のインフラ、そして労働、余暇、日常生活の面での伝統の維持、田舎の生活での文化的および心理的な様式である。

20世紀のロシア農村は多くの点で変化してきた。農業面の転換の過程で、農村の生活様式の解体は急速に進んだ——何世紀にもわたって一体であった労働の領域と日常生活の領域との分離。その多くが自然のリズムや農作業の季節性によって規定され、教会によって神聖化されるとともに靈性を認められたが、その後は権力の指令に多くを依拠した、かつての律動的な農村生活のリズム。人々の交流の可能性を減じていた「農村世界」の地域的な孤立状態が徐々に失われた。しかし、工業の優先的な発展への転換は、都市と農村との調和的な関係や工業的な農業の発展をもたらすことはなかった。村落ネットワークは徐々に縮小した。この一方的な過程はさらなる脱農民化につながった。実際のところ農村住民の生活の質的な改善がみられなかったため、農業部門の近代化は「珍奇な」ことだと判明した。

農業面の転換における第1局面は、2つの段階に明確に分けられる。1930年代までと1930-50年代である。第1段階ではロシアの全土地フォンドは実際のところ不変のままであったが、第2段階では、集中的な工業の発展、都市人口の増加、そして農業における播種の拡大により、全土地フォンドは増加した。1930年代、農業機械製作企業の複合体が形成された時、農作業の機械化の時代が始まった。馬や手作業による牽引から主要な農作業の機械化への転換の過程が目論まれた。外見的には、第2段階での農業面の転換は社会主義的改革の標語のもとで行われたが、その方向性および解決すべき課題は、農業生産組織における大規模な形態の導入という所有形態の根本的な変換、そして全面的な農業生産の集約化に関連したものであった。コルホーズおよびソフホーズが農作物の生産を決定づけはじめた（コルホーズとソフホーズは穀物の総生産高のおよそ90%を生産した）。コルホーズ＝ソフホーズ体制のもとでは、農業技術の受容の向上を背景として、多くの関心が耕地の生産性の上昇に向けられた。すなわち、輪作の導入、土壌への有機肥料の投入、良種の種子の播種、農業カンパニアを展開する期間の短縮である。これらの強化要因によって播種面積の拡大と畜産の生産性の上昇が可能となった。

1930年代において、農業生産組織の大規模な形態が支配的になるなかで、牧草輪作方式がV. R. ウィリアムズによって開発された。多年草の補助を得たり輪作方式を導入することで、土壌の肥沃度の回復と上昇が生物学に基づいて試みられた。同時に、多くの地域で三圃制が集約的な播種システムに置き換えられた。純粋な穀作経営が、先進的な畜産や技術的な穀作農産物の栽培を伴う農業生産に取って代わられた。この点は播種の構造の変化によって示された。農産物の種子の種類に対応した栽培地域区分に関する実験的な作業や家畜の評価が、あらゆる場所で実施された。

大祖国戦争の期間中、〔農業生産〕強化の要素のほぼすべてが失われた。農村は人的資源の貯水池であり、工業発展の原資であった。戦時中の農村人口は、現役の兵士、工業や輸送機関や建設に従

事する者の主要な補充源であり、人的資源の農村からの顕著な流出をもたらした。

戦後期の農業政策において、以下の方針を指摘することができる。コルホーズの耕地の拡大、家畜数および機械数の増加、新たな組織および労働に対する支払いの形態の導入、農村電化、そして最後に農場の拡大である。最後に挙げた手段は、農業政策の中心的な方針とみなすことができる。というのも、工業からの類推により大規模な生産が小規模な生産より優れているという考え方が、農業発展の概念において基礎に据えられ続けていたからである。兵士および都市人口の増加は農業経済の重荷となった。輪作（6年ないし8年周期）は1940年代後半から1950年代にかけてようやく復活した。農業機械の改良の点では一切進展がなかった。修復されたトラクターやその他の農業機械の工場は、戦前の型式の生産に従事したのである。集約的な農業技術の導入にとって痛烈な打撃が、種子の選定および生産の新たな方法に向けて宣戦を布告した「ルイセンコ主義」によってもたらされた。客観的および主観的な要因により外延的な農業発展が農業面の転換の第1局面を支配したが、それは人々に対して食糧の供給面で問題が増加することを伴った。

戦後における農業の発展の進歩的な傾向は、農地を保全するような植林の実施、有機および無機の肥料の使用の拡大にみることができる。1940年代後半には、農村電化が小規模な水力発電施設の建設によって拡大し、1953年以降、コルホーズは国家の電力網に接続され始めた⁽⁵⁾。しかし、粗放的な農業システムはその潜在能力を使い果たしており、増加する都市人口に対する食糧の供給を農業分野が担うことはもはや不可能であった。農業生産に集約的な技術を導入することが必要とされたが、これは農業面の転換の第1局面の期間にはみられなかった。コルホーズ農民はソヴェト市民のなかで最も物質的に立ち遅れた集団であった。コルホーズ農民の物質的な条件の改善を阻害する要因は次の通りであった。厳格な課税政策、コルホーズでの生産活動に対する低賃金、そして農地の個人利用への制限である。コルホーズ農民は社会的な生産の拡大から利益を得ることはなかった。彼らは近代化の変化の担い手にはならなかった。農業面の転換の第2局面（1950-80年）において、農業専門家が機械化技術員とともに近代化の変化の担い手として現れ、農業部門の従事者に占める比率が一貫して上昇する一方、農村のノーメンクラトゥーラ（農場幹部、農村部の党職員やソヴェト幹部を含む）が全般的に大きな影響をもちはじめた。

その結果、農業組織の土地フォンドが拡大し、税、国家調達量、MTS〔機械・トラクター・ステーション〕への現物支払いが増加しただけでなく、内部の意思伝達コストが増加し、したがって生産原価やコルホーズの生産面での損失が増加することとなった⁽⁶⁾。コルホーズの大規模化は経済的には正しいものとはいえなかった。1950年代初期、食糧危機が農村を襲った。

(5) Колхозная жизнь на Урале. 1935-1953 / сост. Х. Кесслер, Г.Е. Корнилов. М.: РОС-СПЭН, 2006, с. 632-636.

(6) Толмачева Р.П. Колхозы Урала в 50-е годы. Томск: Изд-во Томского ун-та, 1981, с. 98.

1953年9月に開催されたソ連共産党中央委員会総会において、農業政策の主要方針の再検討がなされた。⁽⁷⁾ N. S. フルシチョフは、人々の福利を新たな段階に引き上げるために、農業部門において短期間で強力な躍進を遂行することを決定した。上記の要因ならびに農業が工業的基盤をもつように改造する一連の方策により、農業面の転換の第2局面における特別な期間（1950年代中葉から1960年代）を選定することができる。

穀物収穫高の不足および複雑な国際情勢を背景に、政府は処女地や耕作放棄地の開拓による耕地の拡大を再び強いられた。1954年から1959年にかけて374億ルーブルが開拓に投じられた。およそ4,500万ヘクタールの土地が開拓され、穀物の収穫高は年平均で810万トンから1,200万トンへと1.5倍増加した。⁽⁸⁾ このカンパニアの過程で認容された多くの誤謬、穀物への支払い価格の上昇、そしておそらく、かくも大規模な施策が時期尚早になされたことにより、穀物の問題は解決されなかった。農業発展の外延的形態によって、農業発展の潜在能力が完全に枯渇させられたことが明らかになった。1963年にソ連は初めて外国からの穀物の輸入を開始した。

1950年代にコルホーズやソフホーズの技術的な機材は増加した。トラクターの総数は1.9倍に増加した。コルホーズを国家電力網に接続することで、農村電化は引き続き活発になされた。地域の自然＝天候条件に対応しない播種の構成を上から押し付けることは継続され、多年草の播種や純粋な休耕をおこないつつ開墾するという任務を農場に対して指令的な秩序で下達し、計画された任務は以前と同様にしばしば変更され、さまざまな追加的な任務が課された。採択された決定を実行に移す際に一部だけを試みることは、行政機構の反対を受けた。計画は集権的なままであり、農業における経済的刺激を否定していた。農業面の転換のこの段階において、行政機構が近代化へのブレーキとして作用した。

農業部門での回復をなしとげようとする試みは、経済的刺激的不足を一定程度補完するような組織的な手法に基づいていた。この点において、農村にはなほ複雑な成果をもたらした主要な施策に注意を払う必要がある。それは以下の施策である。MTSの組織的再編、機材のコルホーズへの移譲。農場の大規模化の新たな波、コルホーズのソフホーズへの変換。政府の改革。

1950年代末から1960年代初頭にかけては、世界に社会主義経済の全面的な優位性を誇示するような収穫を得るための「魔法の手段」の支援による間断ない試みで満ちていた。これは、世界で拡大しつつあった「緑の革命」を背景に生じた。秀でたトウモロコシも牧草輪作方式との闘争も、この魔法の手段なのであった。これら技術革新のすべてを思慮なしに導入することは、農村の運命に心を悩ます感情をもつ人々の側の抵抗に遭った。クルガン州の著名な農事指導員であり、旧来の農民文化を熱心に研究してきたT. S. マリツェフは、ウラルの〔自然＝天候〕条件において高収量を得

(7) КПСС в резолюциях и решениях съездов, конференций и пленумов ЦК. Изд.8. Т. 6. М.: Политиздат, 1971, с. 385–429.

(8) Симчера В.М. Указ. соч., с. 185.

る農業技術の手法を開発した。彼は、ある土地を1年間休耕にすれば、5年ないし6年ごとに栽培される小麦の総収穫高はより多くなるだろうと主張した。⁽⁹⁾ 牧草輪作と純然たる休耕の利害得失に関する議論の結論は期待はずれのものであり、問題は科学者ではなく官僚によって解決されることとなった。〔輪作の〕5番目の耕地ではトウモロコシ、豆類、ビートが栽培された。牧草輪作システムは耕作の発展を抑制すると表明された。純然たる休耕は完全に排除された。この輪作が導入された結果、耕作地が減少し、土地の荒廃が進み、土壌の悪化が増加した。⁽¹⁰⁾

N. S. フルシチョフは、社会的経営の発展を妨害するブレーキとみなされていた農民の個人副業経営との闘争を開始した。フルシチョフの見解では、個人副業経営はコルホーズの生産活動への注力を削ぎ、農民の周囲に私有財産の気分を増す原因となっている。付属地経営に対する攻勢は、土地の割当の縮小と家畜頭数の削減という形をとった。この農民経営に対する姿勢により、1960年代初頭に農業危機がもたらされた。⁽¹¹⁾

集団化が農村にもたらしたすべての変化にもかかわらず、農民経営は最も重要な機能、すなわち農民家族に必要な生産物を供給するという機能を保持し、満たしてきた。20世紀の半ばでも、個人的な経営がコルホーズ農民の収入や消費をもたらす主要な源泉であった。農戸は概して伝統的な家族経営の特徴を保持してきた。多部門的な構造、半自然的な性格、家族の潜在的労働能力の活用がそれである。農戸は家族、土地、家畜、農具、住宅、経営用設備から構成されていた。権力による個人副業経営への抑圧によって食糧事情の悪化がもたらされた。外国から大量の穀物が買い付けられたため、配給制度は導入されずにすんだ。

状況を好転させ、農業経済を質的に新たなレベルへと転換させる意図から、1960年代後半に一連の施策がとられた。1965年3月のソ連共産党中央委員会総会において、農業生産物の調達に関する固定的な長期計画への転換や、調達価格の引上げ、コルホーズおよびソフホーズに対する課税原則の変更（課税の基準が生産総額ではなく純収入によって計算されることを開始）が告知された。⁽¹²⁾ 組織の活動は収益性によって評価されるよう提議された。農業生産の集約化と特化、土地の改良と新規の土地の開拓という路線が提唱された。付属地経営への姿勢が変化したことを背景に、地方の権力に対して、家畜を飼育し、飼料を提供し、土地を耕作するための支援を住民におこなうよう、指示がなされた。

農業面の転換の第2局面における2番目の段階（1960年代中葉から1980年代後半にかけて）では、

(9) Мальцев Т.С. Система безотвального земледелия. М.: Агропромиздат, 1988.

(10) Вербницкая О.М. Российское крестьянство от Сталина к Хрущеву, середина 40-х начало 60-х гг. М.: Наука, 1992, с. 135.

(11) История крестьянства СССР: в 5-ти т. / ред. Г. Ф. Шерстобитов. М.: Наука, 1988. Т. 4. Крестьянство в годы упрочения и развития социалистического общества, 1945–конец 50-х гг., с. 355.

(12) [文献, 注(15), pp. 502–505]

以下に示す多様な耕作強化システムの複合体の導入がなされた。すなわち、蒸気脱穀、穀物条植、穀草式〔農法〕、耕作＝土地改良、土壤保全、中耕、土壤改良などである。1980年代初頭に農業の地域区分システムが導入されたが、そのシステムのもとでは、すべての一連の要素——輪作、土壤の耕作や播種の方法、肥料、雑草の駆逐、農業用植物の病害虫への対処——は、土壤および天候の条件や農場の物質的＝技術的な基礎を計算に入れなければならなかった。

科学的根拠をもつ耕作システムの構築に関するプログラムが1981年に作成されたことは、集約的な農作体系に向けた重要な転機であった。上記のプログラムは以下の内容を含んでいた。自然条件の農業的な性格、土壤や天候、浸食による地域分類。農業生産の専門化と集中化の方向性、規模、速度。輪作、播種地の構造とその完全化。

農業における集約化は、長期の投資や農作業の包括的な機械化だけでなく、労働生産性の上昇を確実にするためのその他の多くの施策を必要とする。1960年代後半に農業部門に対する投資額はほぼ倍増した。その結果、コルホーズやソフホーズにおける機械・トラクター隊は拡大した。農地には新たな機械のブランドが登場した。トラクターではT-100M型、T-130型、コンバインではニーヴァ（Niva）、コーロス（Kolos）、シビリャーク（Sibiryak）であり、これらによって労働生産性に1.5倍ないし2.5倍の上昇がもたらされた。しかし技術は十分ではなかった。家計の消費分を完全に賄うために、作業の一部、特に野菜栽培や畜産が手作業でおこなわれた。農場の修理作業場において困難が生じたが、それは中央の指令によって供給される技術者や補修部品がコルホーズやソフホーズにおける必要性としばしば合致しなかったからであり、農業機械補給局セリホズテフニカの支局との協議を経ない活動によって機械化のすべての利点が最小化された。

農村電化が引き続きおこなわれた。1980年代には大半の農村に電力が供給されるようになった。より多くの電力が生産に用いられるようになったが、それは最も労働集約的な産業、すなわち畜産業で特にみられた。農村のガス化も開始された。土地改良で実施された施策によって複雑な結果がもたらされた。最も深刻な問題は水の環境面でのバランスが崩れたことであった。

農業における大規模な体系的施策が、顕著な肯定的変化をもたらした。科学アカデミー会員のA. A. ニコノフは資本投資の規模の拡大に関する以下のデータを引用している。無機肥料の投入は1ヘクタール当たりで1960年に2.2kgだったものが1990年に97.5kgに増加した。同じ時期、灌漑された土地の面積は2.3倍増加した。干拓された土地の面積は2.2倍になった。労働の動力装備量は1人当たり5.7馬力から28.8馬力まで増加した。労働者1人当たり電力量は160kWhから4,855kWh(13)に飛躍的に増加した（30.3倍の成長）。

農業の領域における進歩は、農業部門を近代化させる施策の複合体の成果であった。部局の数の集約、投資の増加、農場の特化、そして企業の経営面での自立性の拡大や、調達政策、計画、課税

(13) [文献, 注(16), p.315]

における経済的刺激によるものであった。しかし、1970年代には集権化および行政化に伴う諸過程が強化されるなかで、〔ソ連という〕システムの恒例であり、それまで農業のあり方に影響を及ぼしてきた「労働生産性の上昇に向けた闘争」が、経済的な梃子に代わって再び登場した。

農村の人口には性別および世代の構成の歪みが存在していた。高齢者の比率および絶対数の上昇と、若年層および子供の比率の低下がかなり顕著にみられた。この傾向は出生率の低下と平均余命の上昇によってもたらされたが、それらと同様に、特に20歳から40歳の人口が農村を去るという人口移動によってもたらされた。1950年代から60年代にかけては、農村部における主な課題は低水準の賃金だと考えられていたが、1970年代から80年代にかけては、農村部が都市部と比較して労働条件が厳しく生活水準が低いという点もつばら中心的な課題となった。この点は、農村住民の間で都市部の生活水準〔への認識〕が広まっていたことを示していた。農村の人口減少により、1950年代にはすでに一部の地域で都市住民が農作業に動員され始めた。これは1970年代から80年代にかけて普遍的な現象となり、農村と接する都市のある種の「責務」と化した。コルホーズやソフホーズを支援する企業や組織は、雑草取り、播種、干し草作りといった農作業に労働者を義務的な規律により派遣しなければならなかった。

農民家族に関する家計調査によれば、ウラル中部において農村部の家族のうち12%が伝統的な農民の生活スタイルを固守しており、また彼らは生存の主要な源泉である個人副業経営への志向が特に強かった。上記のカテゴリは、主に高年齢の家族、独身の年配者や構成員の一部が失われた家族から成っていた。⁽¹⁴⁾ 農村部の家族の大半(約70%)は、コルホーズ農民的と呼ぶことができる生活スタイルをとっていた。上記の家族では、家計において個人副業経営からの収入と社会的な生産からの収入はほぼ同額であり、両方の作業に同じ程度参加していた。これらの家族の付属地経営は、大型有角家畜〔牛〕、豚、羊の個人的な飼育に必要な経費を伴いつつ多角化した。1960年代の農村部では、農村＝都市的とみなされる生活スタイルをとるような、別の家族の形態がみられた(その比率はおよそ20%であった)。これらの形態には、コルホーズおよびソフホーズで高額の賃金を支給される家族、すなわち専門家、行政＝管理職員、機械化技術員、そして一部の畜産技師が含まれていた。社会的生産での作業によって高額の現金収入を得ているため、彼らはもはや他の農民のように個人副業経営に依存することはなくなり、それゆえ個人副業経営は彼らにとって副次的、補助的な生産という性格をもつようになった。まず、これらの家族は特に手間のかかる部門である大型有角家畜〔牛〕の飼育を拒んだ。このような状況のもとで、都市部の文化水準や都市的な生活形態が急速に浸透した。農村住民のなかで上記の生活形態が浸透した層は、農業面の転換のこの段階において変容・変化をもたらす存在として行動した。変容のブレーキとなったのは、農村における後進的なインフラや、労働、休暇、生活面での伝統の固守、そして農村生活の文化的、心理的な性格である。

(14) [文献, 注(17), p.170]

農業生産を強化するという問題は、それによつてのみ食糧問題を解決することが可能となるため、以前と同様、焦眉のものでありつづけた。農業の集約化は以下に示す手段の複合体であると理解されていた。機械化、土地改良、化学化、生産の協同と統合、投資の増加がそれであり、それらは農業生産に質的な変化をもたらして新たな段階へと引き上げるはずであった。しかし、これらの手段は、次に示す原則に基づくカンパニアによつて実地に移された。より大きいほど、より良い。それは土壌の改良、化学肥料や農薬の無思慮な使用、経営の全般的な協同と統合においてみられたが、後者は巨大な行政機構の創出の要因となり、その維持には経営が協同組合から得る収入をはるかに上回る費用がかかった。

巨額の投資の大部分は、畜産複合施設や飼育場の建設や改築そして拡張、また機械や設備にも向けられた。農場におけるトラクターの数は3分の1増加した。技術設備が増加したにもかかわらず、農場は、専門技術的にも生産技術的にも、集約的な技術や生産手法へ切り替える準備がなされていなかった。入手可能な備品の利用水準は極度に低かった。農業生産の強化は経費支出の原則に基づいて進展した。農業における集約的な技術の導入に際し、土壌の肥沃度の消耗や土壌の構造の破壊がたいいて伴った。集約的な技術の導入は、要員の不十分な技能、農化学や技術の施設のシステム不全、必要とされる技術設備セットの不在によつて妨げられた。

農業生産の強化政策での特にはっきりとした失敗は、コルホーズおよびソフホーズの労働生産性の指標の分析によつて追跡される。1961年から1982年にかけて、ソ連経済の年平均成長率は3.4%であった。1970年代末から1980年代初頭にかけて、労働生産性は実際には伸びなかった。この成長率により、農業生産の着実な進歩を確保することができなかつた。⁽¹⁵⁾

策定された農業政策では明白な成果を得ることはなかつた。1982年に食糧プログラムが策定されたが、これは食糧生産の分野で危機が進展してきたことを率直に認めたものとみなせる。⁽¹⁶⁾ 農業生産の強化を加速し、穀物の損失を減少させ、生産物の加工を改善させることが要請されていた農工複合体に多くの希望が向けられた。1986年までに、組織面での改革の結果、巨大な行政機構が創出されたが、それは、新技術の導入を確実なものにするよう農業部門と工業部門の発展のバランスをとつて調整することに失敗しただけでなく、巨額の資金を飲み込む追加的なブレーキにもなった。農工複合体の構成企業間の関係では、農業企業と工業企業とが不均等な地位にあることが影響をもたらした。コルホーズやソフホーズが損失を出した時、「農業機械補給局」^{セリホズテフニカ} 隷下の企業、酪農・食肉工業合同が利益を得ていたのである。⁽¹⁷⁾

食糧不足という状況下で、住宅付属地での個人副業経営の発展にとつてさらに適した条件を創出

(15) КПСС в резолюциях и решениях съездов, конференций и пленумов ЦК. Изд.8. Т. 8. М.: Политиздат, 1972, с. 427, 440.

(16) Продовольственная программа СССР на период до 1990 года и меры по её реализации. Материалы майского пленума ЦК КПСС 1982 года. М.: Политиздат, 1984.

するような施策が再びとられた。それらの施策により、建築資材、無機肥料、小規模機械化資金の確保が好転した。コルホーズとソフホーズは農戸との間に家畜・家禽の飼育や買付をめぐる契約を締結することが可能になった。農村に居住する全家族が菜園、家畜、家禽を保有できるようになることが、食糧計画の採択によって促進された。食肉と牛乳の供出を刺激するため、消費協同組合は、かなり希少な財——自動車、オートバイ、じゅうたん——の反対給付的な販売を実施した。都市近郊地帯では園芸活動が人気を博した。

農業生産の減少傾向は、1985年から1990年にかけて、さらに1990年代の全期間を通じて、継続してみられた。ソ連経済において内部の矛盾が拡大し、行政＝指令システムは劣化し、石油輸出による外貨の流入によっても生産の浪費的性質を埋め合わせることはもはや不可能となった。根本的な変化の必要性がさらに重ねて明らかになった。

かくして、1950年代半ばからソ連において新たな農業モデルが実体化した。これは、古い農業モデルが急激に破壊されたことを意味しない。というのも、新たな農業政策の特徴は、理論面および政治面で原則的な基礎を維持するところにあったからである。それと同時に、新たな農業モデルでは、農村での脱農民化を図るスターリンの政策に対する別の選択肢と、1950年代末から1960年代初頭にかけての実験が呈示された。農業面の転換のこの局面において、ソヴェト経済システムを科学的、技術的な革命による諸条件や要請に適合させようとする探求が遂行された。この点において、1965年の農業政策はソヴェト農業部門を改革する試みといえる。その試みは、農業生産の成長率を上昇させるだけでなく、ブルジョワ的な農業面の進化の道程と競合する社会主義的な選択肢を発展させようとするものであった。

農業面の転換のこの局面において、近代的な生産力発展のいくつかの傾向が考慮に入った（生産および資本の集中過程の強化、国家管理の役割の増大、生産の強化、農工複合体への工業の統合、等）。しかし、科学・技術革命のこの段階における特徴（農業発展の社会的、環境的要因の急激な増加、農工複合体の工業的基盤の急速な形成、コンピュータやバイオテクノロジー等の技術の広範な活用）や、農業関係の特質、および世界の農業部門において広範に認められている経済活動の原則（市場メカニズムの発展、集中度や所有形態が多岐にわたる企業の総合体としての農業経済の機能発揮、協業の広範な発展）のなかには、概して過小評価ないし軽視されたものもあった。

農業面の転換のこの局面では、商品＝貨幣関係の要素を計画システムへ導入するという1960年代後半にみられた試みから、行政管理や中央集権そして指令を強化することを通じて、農業経済において市場による調整をすべからず軽視するものへと、農業モデルは進化していった。1980年代後半までの農業部門における経済メカニズムの進化は、反＝市場的な本質を備えていた。1960年代から

(17) Шарыгин М.Д., Макарова Т.Г., Свисткова А.М. Агропромышленный комплекс Уральского Нечерноземья. Пермь: Перм. гос. ун-т им А.М. Горького, 1986, с. 12.

80年代にかけての農業近代化の時期において、誤謬や劇的な対立、歪みは避けられなかった。⁽¹⁸⁾

概して、1950年代から80年代にかけての農業の成長は、一面で、長らく持ち越されてきた改革の遂行の遅れと、他面で、あれやこれやの「新しいやり方」を各地で早急に導入するという急激な飛躍および気運という、異なる面をもっていた。これらの政策の結果、農業において危機的な現象が増加した。

経済における弱点の一つであった農業は、1990年代における社会的、経済的変容の中心であることが判明した。この時期の主要な成果は、自らが陥っている壊滅的な状況を認識し、そして効率的な経済モデルを創出するために市場による調整を活用する原理が必要であることを理解したところにある。

1990年代の経済危機は、農業生産の急減という形で当初現れた。ロシアにおける耕作面積は1990年から1998年にかけて22.5%縮小し、すべての形態の農場による穀物の総収穫高は2.4分の1〔約42%〕まで減少し、1ha当たりの穀物の生産高は12.9ツェントネルまで低下した。⁽¹⁹⁾20世紀において平時に農業生産がこのように急激に減少したことは、他に類例がみられないものであった。生産の減少は農業技術の破壊、土地の荒廃と瘦地化を伴った。

農業政策における強調点は農産物の調達にのみ向けられ、結局のところ、農業部門における必然的な局面の悪化をもたらした。農業部門において集約的な技術を保持するための努力がなされている分野では、悪化を早急に食い止めることは可能であった。農業危機が継続する状況のもとでも、集約的な耕作システムの発展が止まることはなかった。農業生産者の一部は伝統的な旧式の耕作システムに戻った。集約的な耕作システムへの転換、農業面の転換の完遂は再び延期され、繰り延べられることとなった。

農業面の転換の第3局面である1990年代には、市場関係への転換という情況下、個々の地域および国全体で、食糧安全保障の問題は戦略的に重要なものに変化した。食糧品の外国からの調達への高度な依存をもたらした農業生産の危機という状況のもとで、上記の問題は緊迫した響きをもった。それゆえ、農業面の転換の第1局面ないし第2局面においてだけでなく1990年代においても、住民への食糧の十全な供給という問題を完全に解決することは達成されなかった。地域の農業共同体は未解決の問題群を抱えながら21世紀を迎えたが、農業面での発展において展望されているのは、農業面の転換を完遂すること、そして農村の近代化を完遂することでありつづけている。

(18) Наухацкий В.В. Модернизация сельского хозяйства и российская деревня. 1965–2000. Ростов-на-Дону: РГЭУ «РИНХ», 2003, с. 189.

(19) Симчера В.М. Указ соч., с. 177, 500.

参 考 文 献

- Baranov Ye.YU., Kornilov G.Ye., Labuzov V.A. Agrarnoye razvitiye i prodovol'stviye naseleniya Urala. 1928–1934 M.: Dashkov i Ko. Izdatel'sko-torgovaya korporatsiya, 2009.
- Istoriya krest'yanstva SSSR: v 5 t. / Red. G. F. Sherstobitov. T.4. Krest'yanstvo v gody konsolidatsii i razvitiya sotsialisticheskogo obshchestva, 1945–konets 50-kh godov. M.: Nauka, 1988.
- KPSS v rezolyutsiyakh i resheniyakh s"yezdov, konferentsiy i plenumov TsK. Izdaniye T.6. M.: Politizdat, 1971.
- KPSS v rezolyutsiyakh i resheniyakh s"yezdov, konferentsiy i plenumov TsK. Izdaniye 8. T.8. M.: Politizdat, 1972.
- Kolkhoznaya zhizn' na Urale. 1935–1953 / komp. Kh. Kessler, G.Ye. Kornilov. M.: ROSSPEN, 2006.
- Kornilov G.Ye. Agrarnoye razvitiye i sozdaniye sistemy prodovol'stvennogo snabzheniya v pervoy polovine dvadtsatogo veka // Rossiya v XX veke: reformy i revolyutsii. T.1 / pod obshchey summoy. redaktor G.N. Sevost'yanov. M.: Nauka, 2002.
- Kornilov G.Ye. Agrarnaya modernizatsiya Rossii v dvadtsatom veke: etapy, napravleniya, rezul'taty // Ural'skiy istoricheskiy zhurnal. 2008. № 2 (19).
- Kornilov G.Ye. Transformatsiya agrarnoy sfery Urala v pervoy polovine XX veka // XX vek i sel'skaya Rossiya. Tokio: seriya issledovaniy CIRJE Research CIRJE-R-2, 2005.
- Mal'tsev T.S. Sistema bezzemel'nogo zemledeliya. M.: Agropromizdat, 1988.
- Mazur L.N. Byudzhety kollektivnykh fermerov kak istochnik sotsial'no-ekonomicheskoy struktury krest'yanstva Srednego Urala: dis. ... Kandidat nauk. Yekaterinburg, 1992.
- Naseleniye Rossii v XX veke: istoricheskiye ocherki. T.2. 1940–1959 gg. redaktor V.B. Zhiromskaya. M.: IRI RAN, 2001.
- Natsional'naya ekonomika v SSSR v 1990 g. Stat. yezhegodnik M.: Gosudarstvennyy komitet statistiki SSSR, 1991.
- Nauchatskiy V.V. Modernizatsiya sel'skogo khozyaystva i russkaya derevnya. 1965–2000. Rostov-na-Donu: RGP «RINKH», 2003.
- Nikonov A.A. Spiral' mnogovekovoy dramy: agrarnaya nauka i politika Rossii (XVIII–XX vv.). M.: Entsiklopediya russkikh dereven', 1995.
- Prodovol'stvennaya bezopasnost' Urala v XX veke: dokumenty i materialy / pod red. G. Kornilov, V.V. Maslakov. Yekaterinburg, 2000. T.1, T.2.
- Prodovol'stvennaya programma SSSR na period do 1990 goda i mery po yeye realizatsii. Materialy plenarnogo zasedaniya TsK KPSS v maye 1982 goda. M.: Politizdat, 1984.
- Sharygin M.D., Makarova T.G., Svistkova A.M. Agropromyshlennyy kompleks Urala Nechernozem'ye. Perm': Perm'. gosudarstvennyy universitet im. Gor'kiy, 1986.
- Simshera V.M. Razvitiye rossiyskoy ekonomiki za 100 let: 1900–2000 gg. Istoricheskaya seriya, vekovyye tendentsii, institutsional'nyye tsikly. M.: Nauka, 2006.
- Tolmacheva R.P. Kolkhozy Urala v 50-ye gody. Tomsk: Izdatel'stvo Tomskogo gosudarstvennogo universiteta, 1981.
- Verbitskaya O.M. Russkoye krest'yanstvo ot Stalina do Khrushcheva, seredina 40-kh, nachalo 60-kh godov. M.: Nauka, 1992.

要旨: 本論文は、新たな手法によって以下の問題を検証している。すなわち、農村部における経済面、社会面、政治面、人口面、そして文化面における変容の現象について、その動態と強度、進展と方向性を考察するものである。この新たな手法により、20世紀ロシアの農業および農村社会の発展における規則性ならびに特性に関して、より深い理解がもたらされる。

キーワード: 近代化、農業、農村社会、転換、近代化の主体